

庭と職業を両立させていこうとするには並々ならぬものがあるようです。私共の娘達も長女が小学校の3年生にまで成長して参りましたが、これまでの一日一日はたたかいたったといった方がふさわしく、これから先、子供達が親元を巣立って行くようになるまではどんなにか大変なことかと思いやられます。ただこれらの日々がその父親にとっても、母親にとっても、一人一人の子供達にとっても不幸だったということのないように過したい一念でいます。働く女性にとっては激動期ともいえるこの時期が過ぎ去った時、再び原点にもどって教育の仕事をやり直してみたいと思うのが今のところの願望となっています。先輩の方で立派に第一線で活躍されている方がこちらにも何人おられ大変力づけられています。どこまでやれるかわかりませんが、女子高校生を相手に仕事をしていますだけに彼女達を失望させない範囲で頑張りたいと思っています。どうぞ研究室の皆様も貴重な大学生生活の日々を大切にお過ごしになって下さい。(3回生)

さいはての地にあつたもの

大河原治子

主人が山林関係の仕事ですので、結婚後一年間、岐阜県郡上郡八幡町に住みました。岐阜から越美南線北上すること二時間。山々に囲まれ、今なお残るお城の天守閣にのぼると、庭のない二階建の家々がびっしりとひしめきあって火事があったら大変という感じ。べんがら格子の家。街中を長良川の支流・吉田川が澄みきって流れて、ここは鮎もとれるという清流。夏には有名な“郡上踊り”が4日の徹夜をまじえて踊りぬかれるという、“日本のふるさと”の典型のような町でした。ただしこれといった産業もない、小木工業・商業・観光の町でした。

次に転勤して三年間暮したのが、北海道斜里郡斜里町中斜里。札幌から急行で八時間の網走から更に東へ一時間の斜里町。知床半島の根元にあたる漁業を中心とした町です。赴任した四月、さいはての地にはまだ緑のひとかけらもなく、ただ一面土色の広大な原野と白く輝く斜里岳が冷たく迎えてくれて、ここにどんな生活があるのかと胸が一杯になったものですが、まもなく夏がくると、梅雨のない快適な気候・オホーツク沿岸の原生花園・摩周湖・阿寒湖・知床半島……雄大な大自然の中で楽しく遊びました。秋の空の青さ、牧草の山、とうもろこし畑……ついでに穫りたてのとうもろこしのおいしさ、新鮮なお魚のおいしさ。そして長い冬。(最初の冬は出産のため九月末から三月末まで東京へ帰ってしまいましたが)二回の冬も結構今思えばなつかしく楽しかったように思います。二重窓の家の中はストーブを焚けば、簡単に三十度近くに出来て、かえて東京の家の方が寒いくらい。吹雪というのも初めて体験しましたがやはり大したものです。この雪質は北陸

辺と違って重くなく、乾いているので、雪でも傘はさしません。

結局、生活というものは、どこでも大いに違っていて、又よく似ているものです。そして私のいた、たった三年間に斜里の町にみた変化。それは、丁度その間に秘境・知床半島が国立公園に指定されて北海道観光ブームの波に大きくのってクローズアップされたことによるのですが、目に見えただけでも、斜里町の大通りの店舗が軒なみ改装（国立公園指定による補助金が出るとか）、中斜里駅（斜里駅の次、鈍行のみ停車）の駅前の道が舗装され、公民館が建ち、三笠宮一家や、テレビ映画「鉄道公安36号」ロケ隊がやって来て、社会党出身の町長もワンカット出演、原野の中の一軒家の我家にもはるばる水道がひけ、その他その他。……

さて、二年と少し前、東京へ戻ってきました。東京は何でもあって何でも欲しくなって、それでいて大切なものがないのです。不確かな大きな顔をした“どうにもならないようなもの”がのさばっていて、いらいらします。 (6回生)

共働き十年 悪戦の記

金子晴代

◎母の日の前日、学校から帰るや小学三年になる娘がいった。「きょう先生がどんなお母さんになりたいか聞いたよ。私なんて言ったと思う?」「そうね、あまり怒らないおかあさん。」「ううん、家にいるおかあさんっていったんだ。」「……………」

この頃の彼女はこう言えば親の心にこたえることをちゃんと知っている。通勤の辛さ、家事労働と職場の仕事の繁雑、社会的圧力などは乗り越えても子供との心理作戦となると弱い。

◎この夏で共働き十年「さて何が残ったかな」の呟きに「あたし」と、できすぎた答。正直いって九年前、彼女の誕生を喜びだけで迎えられなかった複雑な親心。当時私立に勤めていたので、学校規則上は何ら遠慮することなく産休もとれたはずだが、職場の体制、雰囲気はいいようもない圧力となって私を締めつけた。今の公立校では育児時間もとれるのに当時は若さと意地も手伝って遅刻早退なし、休暇もとら（れ?）ず頑張った。大きなお腹で中央線のラッシュにもまれるとどんな異常児が産まれるかという不安で三十分も早く家を出るよう心がけていた。用務員室で張ったお乳を何度絞った事か。この無理が母性保護にいいわけはなく現在にしわ寄せされている。娘は何人かにリレーされて育った。四年目に保育園に入れた。送り迎えの苦勞の数々。時間を過ぎて息せき切って駆けつける。一人だけポツンと待っている。保育園の先生方はみないい方ばかりだった。でも遠慮がちにこういわれた。「お母さん、私たちも自分の子どもを預けているのです。お迎えがない